

しらかの音楽映画塾の成り立ちを語る時、1991年～02年まで、計9回（91～96年まで毎年開催、98～02年は隔年開催）白鷹町で開催された「アジア国際音楽祭inしらか」（以下、アジア音楽祭）の存在を抜きにはできない。

1991年といえば、世はバブル経済末期の好景気に沸き返り、白鷹町でも、設立間もないアルカディア財団の好調な滑り出しを背景に「音楽でのまちづくり」の機運が盛り上がりを見せていた。時を同じくして、山形県は全県で音楽イベントを展開する「山形県国際音楽祭協議会」の立ち上げを決め、動き出していた。そしてスタートしたアジア音楽祭は、アジア各国からポピュラー音楽家を招き、それを国内の有名音楽家たちが、まるで「迎え入れる」かのように充実した内容で開催された。今まで誰も知らなかったアジアの流行歌が、まさに新鮮に観衆にとらえられ、白鷹町はその後全国的に話題となり、「アジアアンミュージックブーム」の先駆けとなったのであった。

アジア音楽祭からは音楽を通しての交流も生まれた。フィリピンから白鷹にお嫁にいらっしゃった方々と、フィリピンのスーパースター・フレディ＝アギラさんとの交流会の開催や、韓国の伝統的踊りである「サムルノリ」が上演された直後のステージで、韓国からのお嫁さんが感動のスピーチをされるなど、音楽に留まらない数々の感動のシーンが刻まれてきた。

しかし2004年初頭、アジア音楽祭の継続が断念されようとしていた。そんな時、2000年から実行委員長を務めていた私のもとに「アジア音楽祭の火を消すな！」との声が聞こえてきた。声の主は早坂実氏だった。山形市で制作会社を営む彼は、アジア音楽祭とともに30代を過ごし、成長してきたクリエイターである。彼いわく「地元行政にお金が無く助成金を出せないのと、音楽祭の実行委員会のやる気が無いのは別問題である…」という。至極もったもな事。しかし実際には1991年から継続してきた音楽祭の実行委員会は、13年が経過し、初期メンバーから次のメンバーへの移行期間にあったが、うまくいっていなかった。それは実行委員会の主要ポストを担う若き民間人の出現がなく、行政マンがそれをカバーしている状況であったのだ。かくして、アジア音楽祭は2002年開催を最後にその歴史を閉じたのである。

先出の早坂氏は、2003年に全県を会場に行われた国民文化祭・白鷹大会のプロデュースを手がけていた。題材は「地芝居の祭典」、白鷹町に江戸末期から今に伝わる農民芝居を未来につなげるをテーマにし、梅沢富美男氏がステージを盛り上げた。梅沢氏は、白鷹町で今も受け継がれている地芝居「高玉芝居」の話の聞き、心動かされ「劇団にあげてほしい」と、カツラ、舞台衣装、槍などの舞台道具の数々を地元劇団座長にプレゼントするなど、イベントは盛り上がるのうちに終了した。その時、早坂氏はアジア音楽

バリューサイト
VALUE SIGHT

「アジア音楽祭の火を消 あきらめず、その思いを しらかの音楽映画塾

助成金が無くなれば、地域イベントは継続できないのか。イベントはお金だけでなく、仕掛ける人、支える人、参加する人が揃わなくては続けられない。白鷹町で毎年夏に開催されている「しらかの音楽映画塾」は、「地元のイベントをなんとか継続しよう」という、人々の熱意によって作り上げられたイベントである。

祭のスーパーバイザーを長年務めて下さった小室等氏と、白鷹町出身の演劇界の人・小形雄二氏（「スウィングガールズ」の制作で知られる映画制作会社アルタミラピクチャーズの専務）を梅沢氏と対面させる機会を設けていた。実は「しらかの音楽映画塾」のスタートは、この出会いから始まった。早坂氏が「音楽祭終了後の白鷹の起爆剤」に出来る、と考えていたのだ。

そして迎えた2004年、本来であればアジア音楽祭の開催年。しかし、周辺の空気はあきらめムードだった。そこで早坂氏と私は、バイクトライアルのイベント「サンシャイントライアル」を長年手がけている、白鷹町観光協会の事務局長・馬場誠君に声をかけた。彼からは「おれはやりたい、やろうぜ！」の声だった。一方、行政は「今年度の計画に入ってい

ないので、協力は無理、だから来年からにしてほしい。」との対応だった。しかし私たちは、「アジア音楽祭が開催されるはずだった2004年に開催する事に大きな意味がある。」と押し切った。

かくして運営母体はアジア音楽祭実行委員会から数人、そして馬場君率いるサンシャイントライアル実行委員会メンバー有志らによって組織され、年長者であり、アジア音楽祭の実行委員長であった私に実行委員長の役が与えられた。

さて、「しらたかの音楽映画塾」は三つの要素で形



上映後のトークショーに参加した、(左より)早坂氏、小室氏、映画プロデューサー土本氏

言で説明出来ない」など、ご助言をいただくが、今のところすぐにとって変えるような名案は浮かばない。タイトルは、「音楽祭」や「映画祭」ではなく「塾」である。これはアジア音楽祭のDNAを残していきたい意向とともに、世に多くある巨大な「○○○祭」と名乗るほどの規模では無いこと、そしてコアなファンのみが集まるものではない、もっと「しらたかの」な軽さで楽しめるものにしたいのコンセプトがそこにはある。そして「我々の日常にこそ、都会生活者の方々の憧れがある」と願っている。このことはアジア音楽祭の経験を通して知り得た知恵である。白鷹に住むわれわれは自然・食・文化など、多くの素晴らしい財産を持っている。この恵みを後世に残し、伝えることが使命であると考えている。

今後の課題は「人づくり」である。どなたが唱えられたか、まちづくりに必要な人として「わかもの(若者)」「ば〇もの」「よそもの」と言われている。かくいう私も生まれは東京下町である。愛する女房の故郷にやってきた「よそもの」である。山形には早坂氏のような「ば〇もの(失礼)」もいる。あとはパワー溢れる地元わかもの養成である。やり直しが出来ること、これすなわち若いと言うこと。地元わかものには今だからこそ許されるやんちゃぶりを発揮して、とにかく無茶でもいい、「行動していて」ほしい。動かさずの先読みはわれわれの役目である。

■ 原田 利明 (はらだ・としあき)

しらたかの音楽映画塾 実行委員長。
原田ふとん店 睡眠アドバイザー。
1953年東京・浅草生まれ。白鷹町商工会青年部長を経て、現在、商工会理事。
〒992-0771 山形県西置賜郡白鷹町鮎貝3857
TEL 0238-85-2337・FAX 0238-85-2451

置賜

すな」 実現した



しらたかの音楽映画塾
実行委員長

原田 利明

成されている。「音楽」「映画」そして「白鷹町体験」である。テーマ上映としての映画や制作者のトーク、そして自転車に乗って町内を走ったり、手作りの味噌作りを体験する。しらたかの面白さに満ちた内容である。五回目の今年も、町唯一の県立高校の統廃合が議論されている現状に対して「ガンバレ！荒砥高校コンサート」を合わせて開催、フラワー長井線のマイレール運動とともに「この町にはこの高校が必要だ！」のメッセージを大いにアピールした。

夜には実行委員会メンバーが運営する「ハラダ・ロック・カフェ」でゲスト、お客様、実行委員が深夜まで語らう素敵な時間が流れる。このカフェは私の名前を実行委員会メンバーが使ったものである。一番の楽しみでもある。

「イベントのタイトルが長い」、「イベント内容が一